

・ ・ その 35 参照 島田正路著「古事記と言霊」より

言霊について書きます。

とても重要です。 宇宙の理そのもの 人間の働きそのもの

日本 霊の本の国 の隠されていた言霊の秘密が表に出てきました。それは明治天皇から始まったと言われていています。日本を理解するには言霊を理解するしかないのです。 人間の心を理解するには言霊を理解するしかないのです。

下記の記号はひふみ神示の読ませ方です

⊙ (かみ) → \ → キ → キが流れ 氣となる

○ (身体) + \ (キ) = ⊙ (かみ) 身体に キ が修まって神となる

「氣」について説明します。この宇宙は五つのバイブレーションが存在しています。 バイブレーションはありますがそれ自体は全く動かない状態で存在しています。 (アイウエオ) 五母音です。 暗闇の世界です。

寺院の五重塔はこの五母音の重なりを象徴しています。

人間の心はこの五母音の世界に住んでいます。家の語源はこの心の住処が五重の重なりなので五重 (いえ) と云うところからきています。

人間が誕生して生命を受けると、人間の脳に創造性の火花が働きます。これは知性の火花と呼ぶものでしょうか、この火花が8種類あります (Ki Si Ti Ni Hi Mi Yi Ri=キシチニヒミイリ) 実際には (K S T N H M Y R) の火花のリズムで発音できません。 発音できるように (イ=i) 親音が火花のリズムにくっついて、発音できるようになっています。8つの父韻を創造神と呼びます。一般的に「氣」とよばれるものの本当の姿です。 父韻により光りの世界が現われます。

・ ・ その 36 に続く

その 36 参照 島田正路著「古事記と言霊」より

ワ Wa	ラ	ヤ Ya	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア a
ヰ Wi	リ Ri	イ Yi	ミ Mi	ヒ Hi	ニ Ni	チ Ti	シ Si	キ Ki	イ i
ウ Wu	ル	ユ Yu	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ u
エ We	レ	エ Ye	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ e
ヲ Wo	ロ	ヨ Yo	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ o

横 10 行 縦五列

8つの父韻と母音がわ (アの列) 半母音がわ (ワの列) 合わせて 10 個 行がアイウエオ表は並びます。これを十理 (とり) と云います。 神社の鳥居 (と り い) の語源です。 鳥 八咫鳥 (神の案内) 天の浮橋 などと呼ばれています。

母音側はアの列=自分=主体 (物事を始めようとする側) 半母音側はワの列=相手=客体 (物事の対象となる側) の意味

母音は主体（自分）を表したもの 半母音は客体（相手）を表したもの（ワ行のワキウエヲを指します。）

右のア列から左のワ列に父韻は並びます。父韻は人間の意志の働かす順序を表します。8つの意志が存在します。

アイウエオを母音と呼び K S T N H M Y R 8つの火花を父韻と呼びます。動かない母音に父韻が働きかけてバイブレーションとなって動き始めます。

父韻は i=イ=キがないと発音できません (K S T N H M Y R) そこで i が父韻を支えて Ki Si Ti Ni Hi Mi Yi Ri=キシチニヒミイリ となり発音できるようになります。) キシチニヒミイリ 母音の中でもこの特殊な i=イ=キを親韻と呼びます。(父韻を支えて動けるように力を与えています。)

以上のバイブレーション父韻 母音 半母音 親音が人間が生まれたときに父韻の活動により、働き始めます。意識しなくても働き始めます。

この状態を天の浮橋に立つ 天霧 出雲 と呼ばれています。17音あります。

・ ・ その 37 に続く

・ ・ その 37 参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より

言霊父韻は8つあります。陰陽、正反、作用反作用の関係にある二つ一組である四組の働きです。チイ・キミ・ヒニ・シリの四組です。創造知性です。それが世界に広がったもので、中国では八卦、仏教では八正道、ドイツでは火花 (Funke) などとして昔から取り上げられています。しかし本質そのものではなく示唆するものとしてです。

それは日本の言霊の父韻そのものです。

チ・ヒ・ミ・リは発音すると気が自分から外に流れ出ます。(光り・真善美愛の方向です。)

イ・キ・ニ・シは発音すると気が自分の方に流れ込みます。(影・偽悪醜憎の方向です。)

ここからは心の中の動きで父韻を説明します。

父韻チ ・ イ (Yi)

九州薩摩に伝わる剣術の流派に示現流があります。顕の構えは有名で、八双の構えといい、剣を右脇に垂直に立てて構え、敵に対して真っ直ぐに突進して、そのまま剣を振りおろす剣法で、その際の掛け声が「チェストー」と云います。

示現流は試合に当たり小賢しい駆け引きなどを用いず、身体全部を相手にぶつけるつもりで突進し、剣を大上段から真っ直ぐに敵に振りおろし、その一撃が失敗すれば死ぬ覚悟で、始めの攻撃に一身をかける剣法です。

これに見られるように一瞬の動作の中に自らの生命、または人格の全体を以て形に表す意志の力動、これが父韻チであります。

父韻チは「精神宇宙がそのまま現象となって姿を現わす力動韻」と説明します。

別な日常の例で日頃付き合っている友達とちょっとしたことで言い争い、相手を傷つけてしまったとします。翌日になって「悪いことをしてしまったな」と気づき、謝りに行かなければ、と思いません。けれども言い争いの場面が思い出され、「あいつがあんな事を言わなかったら、自分も決定的に

彼を傷つけるような言葉は口にださずに済んだはずだ」と言い訳がましい言葉が頭に浮かび、中々素直に謝る気持ちになれないで、ぐずぐずしてしまいます。色々考えめぐみ、悩んだ末にふっと気が付きました。「考えて見たって仕方が無い。彼の心を傷つけたのは私なんだから、あれこれの経緯はどうであれ、彼のところへ行って素直に謝ろう」と決心が付きました。もうこうなれば仲直りは間違いないでしょう。

ああだこうだ、と言い訳を言って自分を弁護することでは事態を解決できないと知って、相手がどんなに非難しようと、素直に100パーセント自分の非を認めて謝ろうとする心、その心が起こる瞬間の意志の力動が父韻チであります。

父韻イは父韻チと作用・反作用の関係にあります。ご承知のことでありましょうが、父韻イと言います時は、母音のイではなく、ヤイユエヨの行の中のイのことです。父韻チが「心の宇宙全体がそのまま現象となって現れ出る意志の力動韻」ということでありましたから、それと反作用をなす父韻イとは「心の全体が現象となって現れ出て、その現象の形がそのまま持続する力動」と説明することが出来ます。

先の例にありますように「兎に角言い訳は抜きにしても、百パーセント自分が悪かったと詫びよう」と決心しました。この瞬間の決意の心の力動が父韻チでありました。その心が決まりますと、その決心は変わることなく、その心の状態は持続します。自分の非を認め、率直に相手に謝るという心は変わることなく続きます。それはあたかも今決意したのと同じ気持ちです。パッと現れたものがそのまま今現われたものごとく持続する動きの韻、これが父韻イというわけです。

チの音は（バイブレーションは）氣の流れが自分の外に向かいます。光りの方向です。

イ(Yi)の音は（バイブレーションは）氣の流れが自分の内に向かいます。影の方向です。

・ ・ その 38 に続く

その 38 参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より

父韻 キ ・ ミ

何か起こった瞬間に自分の精神宇宙の一部に位置している体験的知識、信念、希望等を自らの意識に掻き寄せよう（父韻キ）または反対にそれらのものに結び付こう（父韻ミ）とする意志の力動韻だと言うことが出来ます。

人がある時、何かの出来事に出会うとします。それが何であるか、またはどんな内容を持つのか、戸惑います。その瞬間、その人は自分の過去に経験した事がある似通った物事を思い起こし、それを掻き寄せて、眼前のものと比較して何であるか、どんな内容を明らかに知ろうとします。この記憶の中から現時点に思いついたものを引っ張り出してこようとする動きの原動力となる意志の韻が父韻キであります。

この父韻が理解されますと、言霊父韻というものが私達人間の日常生活の中で休むことなく活動している心の根本要素であることがお分かり頂けるのではないのでしょうか。

ある記憶を精神界の一点から意識の中心地点に引っ張ってくる韻が父韻キであるならば、立場をその引っ張られる方へ移してみるとしたら、逆に意識がその記憶に結び付こうとする動きとなる、ということが出来ます。これが父韻ミの働きです。

まさに父韻キと父韻ミとは作用反作用の関係にあり、一つの動作の主体と客体の両立場から見たものであることが明らかであります。

父韻ミの音（バイブレーション）は氣の流れが自分から外へ流れます（光りの方向です）

父韻キの音（バイブレーション）はキの流れが自分の内へ流れます（影の方向です）

心を下肚に集める→意識を下肚の仙骨前に集める→ミを発音しながら手を前に出す。→ミが自分の内から外に手を通して流れる→この状態を維持→他の人にこの手を力一杯曲がる方向に曲げてもらいます。→ビクともしない状態です。

逆にキを発音しながら同じ事をやります。この時は自分の腕から力が抜けるように弱い状態になります。

氣の流れの方向のせいでこのようなことが起こります。

・ ・ その 39 に続く

その 39 参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より

父韻 シ ・ リ

人が何か一つのことを考え始めますと、その思いが知らず知らずのうちにどんどん広がって行き、心の中に今まで体験したこと、印象を持ったもの等に結び付きながら発展して行く事の経験を誰でも持っていることと思います。この心の中の動きは渦巻き状または螺旋状に広がって行きます。この心の動きの原動力を父韻リと言います。

芭蕉の辞世の句に「旅に病んで 夢は枯れ野を 駆けめぐる」があります。真実を求めて芭蕉は一生を過ごしました。そして生が終わらんとするときに詠んだ句がこの句だと言われます。

死が眼前に迫ったとき、芭蕉の脳裏に過ぎし日の色々な出来事が駆け巡ったことでしょう。そして芭蕉の心の中を駆け巡った体験の記憶はただ何の繋がりもなく思い出されたのではありません。そのおのおのは死の迫る芭蕉にとって一生追いかけて求めた俳句の心というテーマに貫かれたものであったに違いありません。

俳句の本来の心の真実を心の糸車（螺旋）として、一生の思い出が心を駆け巡ったに違いありません。この螺旋状の現象の発展の原動力が父韻リであります。

意識が心の空間を限りなく発展して行って、何時のまにか、霞のごとく忘却のかなたに消えてしまうことがしばしばです。

けれども時にはその螺旋形の発展の中で、ふとその思いの発展の主要テーマの内容が何であったか、に気付くこともあります。すると「ああ、そうなのだ」と連想の輪が瞬時に消えて、心の中心にその連想の主要テーマがしっかりと収まって、心は静かに収まります。

この動きは心の螺旋状・渦巻き状とは作用・反作用の関係になる事はご理解頂けると思います。

この動きの原動力を父韻シと呼びます。静まり澄んだ心の真実を「悟り」といいます。

リの音（バイブレーション）は氣の流れが自分の外に向かいます。（光りの方向です。）

シの音（バイブレーション）は氣の流れが自分の内に向かいます。（影の方向です）

・ ・ その 40 に続く

その 40 参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より

父韻 ヒ ・ ニ

以前確かに会ったことのある人と久しぶりに出合いました。「やあ、しばらくでございませう」と挨拶して別れたのですが、何処であった人なのか、何という名前の人なのか、がどうしても思い出せません。思い出そうとすればするほど、心の奥に沈んでいく何か大切な宝物のような、また思い出せないと気になって仕方がないような感じで、胸内にもやもやくすぶり続けます。

そのなんとももどかしい気持ちが、思いがけない時一瞬に晴れて「ああ、そうだ。3年前の誰さんの結婚披露宴でたまたまお隣の席に座った花嫁の大学の先生だと自己紹介してくれた A 氏」だと記憶が蘇ります。以上の様に記憶が心の表面にパッと鮮やかに浮かび上がってくる心の動きの原動力が父韻ヒであります。

それと反対に、心の内にぶすぶすと燻り続けるのは、実は一つの思いが真実に向かって煮詰められていることなのです。充分煮詰めつくされたとき、その真実が言葉となって心の表面に浮かび上がってきます。この心の力動が父韻ニです。

ヒの音（バイブレーション）は氣の流れが自分から外に向かいます。（光りの方向です）

ニの音（バイブレーション）は氣の流れが自分の内に向かいます。（影の方向です）

以上 8 個の父韻の説明でした。

・ ・ その 41 に続く

い) 言葉を発すると、発した言葉に沿った氣の流れが起こる。

このキシチニヒミイリの八つの父韻が言霊ウの宇宙に働きかけて、社会の産業・経済の現象を生んでいく状況は、映画のフィルムと映写されるドラマの関係に似ています。

先の魚屋さんとお客との交渉を例にとり、八父韻配列を説明しましたとき時は、配列の順序と一音一音の父韻の内容を明らかにするために、店主とお客との間に起こる現象の方からその原動力としての父韻を説明することになりましその 211 にづく

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

父韻について 6

その 211

於^{おもだる}母陀琉の神・妹^{いもあやかしこね}阿夜訶志古泥の神

言靈 ヒ・ニ

この二つの神名から容易に言靈の内容を推察できます。於母陀琉の神を日本書紀では^{おもたるとのみこと}面足尊と書いてありますように、表面に（面）が完成する韻とすることができます。何が完成することなのか。人はその人の前で起こっている物事を的確に把握することが出来ず、思い悩むことがあります。それが何かの瞬間事情が飲み込め、どうしたことなのか表現が頭の中ではっきりと出来上がる事があります。このように物事の事態をしっかりと把握してその言葉としての表現が心の表面に完成する働きの韻、これが言靈ヒであります。

この言靈ヒと妹背の関係にあります妹阿夜訶志古泥の神が示す言靈ニの内容は自ずと明らかであります。阿夜訶志古泥とは「あやにかしこき音」の意味です。阿夜とは夜文字が使われていることから、心の表面とは反対に心中心部分を暗示しています。心の底の部分に物事の原因となる音が煮詰まり成る韻これが言靈ニであります。

例を引いてみましょう、物事の実際の内容が理解でき、それをどう表現したらよいか、が言葉として完成し、「分かった」と思って心が晴れやかになった。そのとき同時に心の中心にはすでに次の時代の発生する根っことなるものが、何か知らないが煮詰まり成っていることです。その動きにおいて前者が言靈ヒであり、後者が言靈ニの父韻であるわけです。

ヒ 精神内容表現が精神宇宙球の表面に完成する韻

ニ その反対に物事の現象の種が精神宇宙の中核に煮詰まり成る韻

その 212 につづく

その 44 参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より

以上、母音ウの次元宇宙に働きかけて現象を生んでいく八つの父韻の配列キシチニヒミイリについて、魚屋の店主とお客の心的交渉を例に引いて説明をいたしました。お分かり願いましたでしょうか。魚屋とお客との場合だけでなく、個人と集団との交渉、会社と会社との間、国家間交渉におきましても、ウ次元の活動である限り、キシチニヒミイリの父韻の配列には変わりありません。

交渉の人間の心の動きの原動力となる八つの父韻の配列を観察するならば、全て同一の原理が働いていることがお分かりになるかと思えます。

またその原動力となる八つの父韻の一つ一つから発せられる精神の力、いわゆる霊力と呼ばれるべき力と雰囲気、その人なりの修練によって会得した程度によって（もちろんその人は言霊原理を知らなくても）交渉の成否が定まってくることになりましょう。

霊力とは父韻が持つ氣の流れを起こす力のことでしょう。心が下肚に鎮まり、この心で思い（意志を使い）言葉を発すると、発した言葉に沿った氣の流れが起こる。

このキシチニヒミイリの八つの父韻が言霊ウの宇宙に働きかけて、社会の産業・経済の現象を生んでいく状況は、映画のフィルムと映写されるドラマの関係に似ています。

先の魚屋さんとお客との交渉を例にとって、八父韻配列を説明しましたとき時は、配列の順序と一音一音の父韻の内容を明らかにするために、店主とお客との間に起こる現象の方からその原動力としての父韻を説明することになりました。それで間違いないのですが、

一つ言い残したことが事があります。店主が「いらっしゃい」と言った瞬間から、店主の心の中に「キシチニヒミイリ」の父韻の配列が商売の心構えとして出来ているという事です。その場合、店主の心の中の八つの父韻の心構えは、映画における映写機に納められたフィルムに当たります。そしてその心構えの働きによって店主とお客との間の交渉という映画のドラマが繰り広げられるということになります。

このように八つの父韻の配列、それが当事者の行動の心構えであります、その心構えが時の経過と共に現実の出来事（現象）を生んでいきます。言葉を換えて言いますと、八つの父韻が空間を次々に変化させて行きます。このことから「時間とは空間の変化であり、空間とは時間の内容である」という難しい哲学の命題が証明されるということにもなります。

・ ・ その 45 に続く

その 45 参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より

言霊オの次元の意志（父韻の）の使い方

父韻の並び（キチミヒシニイリ）

言霊オ（赤玉音図）「経験知」中心の心の構造図

言霊オ（赤玉音図）

ワ	ラ	ヤ	ナ	サ	ハ	マ	タ	カ	ア
キ	リ	イ	ニ	シ	ヒ	ミ	チ	キ	イ
ヲ	ロ	ヨ	ノ	ソ	ホ	モ	ト	コ	オ
ウ	ル	ユ	ヌ	ス	フ	ム	ツ	ク	ウ
エ	レ	エ	ネ	セ	ヘ	メ	テ	ケ	エ

言霊オ次元の人間性能は経験知であり、この性能が社会的に発展した活動は一般に物質並びに精神科学であります。学問と言えば普通このことを指しましょう。ここでは一人の科学者の研究態度を例にとって、その研究の心組みを説明することにします。

普通の場合、学問の研究は一つの疑問から始まります。その時まで真実と一般的に思われていた現象間の法則に当てはまらない一つの出来事を発見しました。「あれっ、これはどうしてだ」とその出来事を自分の意識の中心に掻き込んで来ることから始まります。この原動力が「父韻キ」であります。

その疑問はその時まで通用している科学の全分野の法則・原理の体系の上に検討されます。「父韻チ」が登場します。

そして以前の通説であった理論と、新しい疑問として浮かび上がってきた現象とを共に満足させる事の可能な新しい理論の立場が発見され、それと結びつけられます。この動作が「父韻ミ」を示します。

新しい理論は新しい表現の言葉となって発表され「父韻ヒ」、その理論が次に自覚され「父韻シ」、その理論が（真実）として認められ「父韻ニ」、その後の社会に定着します「父韻イ」。けれどもやがてはその定着している理論に対する疑問が起こり、八つの父韻の手順は繰り返されることとなります。「父韻リ」

母音オに作用する父韻の配列キチミヒシニイリと続く学問の心構え、心の持ち方を哲学で弁証法的思考といい、正反合の順の討論形式を基礎とする物の研究方法であります

・ ・ その 46 に続く

その 46 参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より

言霊アの次元（感情）の意志の使い方

言霊ア（宝音図）（感情）中心の心の構造図

㊦	ミ	イ	ニ	シ	ヒ	リ	キ	チ	イ
㊧	メ	エ	ネ	セ	ヘ	レ	ケ	テ	エ
㊨	マ	ヤ	ナ	サ	ハ	ラ	カ	タ	ア
㊩	モ	ヨ	ノ	ソ	ホ	ロ	コ	ト	オ
㊪	ム	ユ	ヌ	ス	フ	ル	ク	ツ	ウ

父韻の配列は（チキリヒシニイミ）と並びます。その働きによって起こる現象は感情であり、その社会的活動は宗教・芸術となって現われます。一人の芸術家を例にとってその父韻の配列を説明しましょう。

ア次元に作用する八父韻の働きは先ず「父韻チ」で始まります。芸術家の心が美という物に対して純粹であればあるほど、その創作活動に自分自身のすべて、全人格を投入します。そうでなければ良い芸術作品は生まれませんでしょう。

その活動に全人格を投入する原動力は正しく「父韻チ」であります。投入した全人格の中から自分はこの創作に於いて自分の何を表現したいのか、が意識の中心に掻き繰られて「父韻キ」、その目的は如何なる表現方法があるか、が心の中を駆け巡って検討されます。「父韻リ」の働きです。

そしてこの方法「父韻ヒ」で行こうと決定され「父韻シ」、その方針が心の中に納得されます「父韻ニ」。

心の中に表現しようとする目的と表現の方法が明らかに意識されれば、その気持ちは創作活動中ず〜と持続し「父韻イ」、作品は形となって現われていき、当初の創作の意図に近づき結び付いていきます。そしてその完成された作品が創作者自身から離れ、独立した存在として鑑賞者の心に訴え結び付こうとする存在となります。「父韻ミ」。

以上ア次元に働く八父韻の作用を芸術家の活動を例として説明しました。芸術活動を宗教活動に変えましても、起こって来る現象は異なってもその活動の原動力となる八つの父韻の配列は変わることがありません。宗教家の活動を自らの心に想像しながら、読者ご自身でその八つの父韻の配列に変更がないことをお試しになってはいかがでありますでしょうか。

ここまで母音ウオアの三つの次元宇宙に働く八父韻のそれぞれの配列について説明してきました。これら三つの配列を見て気付く顕著な相違について少々お話ししておこうと思います。それは三つの配列のそれぞれの最初の父韻についてであります。ウとオの次元に於いては父韻キで始まりますが、ア次元ではチで始まることです。この相違は当事者の心構えの如何なる違いを示しているのでしょうか。

次元ウ・オの宇宙に働きかける父韻の初めはキであります。キは先に解説しましたように「精神宇宙（心全体）の中からある1つの記憶または経験を意識の中心に掻き繰って来る韻」であります。

このことに示されますように、心の動きの初めから主体と客体が分れています。

心の先天的構造の中に意識の萌芽とも云える動きが起こる事、古事記神話の冒頭の文章「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は天の御中主の神（言霊ウ）、・・・」と示されている人間生命の本体である「精神宇宙全体と、そこより発現してくる主体と客体がまだ分かれていない意識の芽（言霊ウ）」が双方とも、ウとオの次元の活動意識では無視されているということを示しています。

平易に表現しますと、次元ウから起こる産業・経済活動と次元オの学問の活動では、人間生命の全人格がそのまま活動の本体となって活動すると云うことはない、ということが判ります。

次元ウの活動の始めの父韻キは「売ろう、儲けよう、・・・」の意識であり、次元オの学問における父韻キは「従来の説に対する疑問」であります。

それに対して次元アの宗教・芸術活動の最初の父韻チは「精神宇宙がそのまま活動となって現れ出る韻」であり、その活動が人間人格全体の感動から始まることです。愛という経験・知識ではありません。芸術活動においては美的感動から始まるという事が出来ます。（愛からでない宗教活動、美的感動が感じられない芸術作品がないわけではありませんが。）

・ ・ その 47 に 続 く

その 47 参照 島田正路著「コトタマ学会報集下」より

言霊エの宇宙（実践智）

父韻の配列は（チキミヒリニイシ）です。

言霊エの次元（天津太祝詞音図）の心の構造図

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
ヰ	シ	イ	ニ	リ	ヒ	ミ	キ	チ	イ
ヱ	セ	エ	ネ	レ	ヘ	メ	ケ	テ	エ
ヲ	ソ	ヨ	ノ	ロ	ホ	モ	コ	ト	オ
ウ	ス	ユ	ヌ	ル	フ	ム	ク	ツ	ウ

この配列は人間の実践智と呼ばれる智性の原動力となる並び方であります。実践智は人間社会を創造していく力でありますが、その最も典型的なものが五十音言霊の法則に基づく古事記の所謂「禊祓・みそぎはらい」である人類文明創造の原理、八咫鏡であります。五十音の言霊によって結界された清浄無垢な精神世界を古事記は高天原と呼びますが、その名称は実践智の父韻の配列チキミヒリニイシ（アの段の並び タカマハラナヤサ）から来ているのであります。

エ次元の八父韻の配列は前のア次元の時と同様父韻チで始まります。アの次元の父韻においては、その行為の初めが人間の全人格の感動である愛の心または美の感動から起こると説明しました。

エ次元の行為の初め父韻チも全人格の発動であることに違いはありませんが、エ次元の行為の典型である禊祓で説明しますと、その全人格とは言霊の学問で教えられます人間の心の全景であるアイウエオ五十音言霊音図の事となります。

「禊祓・みそぎはらい」といわれる人類文明創造の行為の初めは、人間精神の全構造である五十音言霊図が心の中に姿を現わす事から始まります。

チに続く父韻はキミです。キは掻き繰る韻、ミは外に結び付こうとする韻です。そこで父韻キは実践智にあっては眼前の状態を正確に把握することであり、父韻ミは現況を出発点として如何なる状態にまで変化させれば良いか、の目標を設定することであります。

これを言霊学で説明しますと五十音言霊図を鏡として現状と目標との時・処・位が見定められる、ということです

世の中のどんな出来事にも時と場所と位（次元）が具わっています。

この3つがないものは現実のものではなく空想の産物にすぎません。その出来事は何時、如何なる環境において、5つの人間性能の中のどの次元で起こっているか、が確かめられます。以上の父韻チキミが確かめられますと、父韻キによる目標に導く事が出来る言葉が定まります。これを可能にするのが父韻ヒです。

以前古事記「禊祓」の説明の時、アル中の患者に対する医師の態度を例に引いたことがありました。若い時の心の痛手を癒やしきれないで、朝から晩まで酒を飲み、高血圧症状が続くアル中の患者に

対し医者は「酒を止めろ」の一辺倒であります。これは実は治療しないのと同じです。アル中の患者が少しでも酒量を少なくしようと決意するきっかけを与える言葉が医者要求されているのです。

実践智チキミヒの言葉とはそういう言葉を生む英智のことです。言霊図に照らし現況と目標との時処位が明らかにされれば、自らその言葉は生まれてきます。人にはその能力が生来具わっているのです。

その英智の言葉が生まれてくれば（父韻ヒ）、その影響力は現況を大きく動かし（父韻リ）、行動の中心課題画定まり（父韻ニ）、活動が持続して目標に向かって変化して行き（父韻イ）、遂に目標到達し円満解決となります。（父韻シ）

次元エに働く父韻の配列の説明は以上のようにありますが、実はこの父韻チキミヒリニイシの配列の心構えは現代人にとって最も体得の難しい事柄といっても過言ではありません。

この次元に求められる言葉とは、単に「現状の説明」ではなく、また「目標への激励」でもありません。現状と目標の双方の時処位の内容を良く理解しながら、双方の説明ではない言葉、現状から目標に確実に到達させる事が可能な権威ある言葉のことであります。そして、その心構えを可能にすることが五十音言霊学の最終的な目的でもあります。

以上ウオアエ 4 つの次元から現象を起こす原動力となるそれぞれの 8 つの父韻の配列について説明しました。

ご理解頂けたでしょうか。何分にも、父韻とは頭脳の先天構造内の言霊であり、意識で捉えることの出来ないものであります。でありますから、その内容についてのどんな解説を労しましても所詮は禅で云う「指月の指」に過ぎません。「あれがお月様だよ」と指さすその指をいくら凝視しても、実際の月を捉えることは出来ません。同様に父韻に関する説明の理解だけでは父韻の把握は不可能です。説明を案内役として、読者ご自身の心の内に閃く創造意志の火花の捕捉し、内観していただきたいと思えます。

最後にウオアエの四次元に働く八つの父韻のそれぞれの最後の父韻の相違についてお話します。言霊ウとオの次元の父韻の終わりはりです。父韻リは心の宇宙の中に螺旋状に発展する韻です。

それ故父韻リで終わる言霊ウ・オの活動は全て一つの行為の終わりが次の動きの初めとなる限らない流転の相を表します。商売の活動や学問の研究の仕事の中にその消息を明らかに汲み取ることが出来ます。

ア次元の父韻の配列は父韻ミで終わります。父韻ミは対象に結び付こうとする韻です。ア段の行為の宗教・芸術の全身全霊の行為も、結局は客体に「訴える」でおわり、結果はその客体の受け取り方如何にかかっています。

エ段の実践智の行為だけが主体的・客体的に円満に完遂され、大団円で終わることの出来る唯一の智性であり、哲学的に云う至上命令の言葉、真実の「権威」（御稜威みいず）の行為であります。

・ ・ その 48 に続く

父韻と母音がかけ合わさって動くバイブレーションが現われます。これを子音と呼んでいます。
この父韻 母音 半母音 子韻 を総て合わせて言霊と呼びます。五十音です。

「母音アイウエオをローマ字に変えて a i u e o となります。父韻の K と a が掛合わさって Ka=カ の子員が誕生します。以上全てを掛け合わせると 32 個の子音が生まれます。
それとワ行の 半母音ワヰウヱヲを合わせて五十音になります。」

このかけ合わさった言霊がキの流れを創造し氣となります。 その氣が肉体を流れ身体を動かします。その身体で文化創造の活動をして歓びを感じることが人間の生きる目的なのです。

「相手に思いを伝えるときの人間の意志の使い方の順が (8 つの父韻のことを指します。) 4 通りだけです。その人の住んでいる言霊の世界で決まります。」

人間の心は言葉を運ぶ船です。自分から相手に対して言葉を運びお互いに認識を共有して初めて事実が存在します。「赤いリンゴ」という言葉で相手も「赤いリンゴ」を認識してお互いの中で事実として確認出来ます。

心の動きが現象として現われます。

人間は生まれ出たときは一段階目からスタートします。

一段階目は 言霊ウの次元 生まれ出た人間に最初に備わっている機能が「欲望」です。お乳が欲しい、お金が欲しい、遊びたい等

次にいろいろ 二段階目は 言霊オの次元 身体で経験したことを知識として蓄えることが出来ます「学問、知識、科学」の世界です。

次に「欲望・経済・産業」で生きると 1 つの欲望の終わりは次の欲望へと続き切りがありません。

「学問、知識、科学の世界」も1つの発明が終わると次の発明と続き切りがありません。この二つの世界は終わりがなく次から次と切りが無く心が疲れ病んでいきます。

次に 言霊アの次元 三段階目はそんなことはどうでもよくなり、より幸せに生きるには、を目指す「宗教、芸術、音楽」の世界です。

今までの三つの世界の生き方自利の道です。三段階目は自分の心に安定を求める段階です。

本来自分だけなら、これで善いのですが、隣人に第一段階、第二段階で鬱々とした人生に困り果てて余裕も無く、心を病んでいる人達、がいてるのを見過ごせない、助けたいと思い始めます。

それが、言霊エの次元 第四段階の「実践知、道徳、倫理、政治」の世界です。

実践知の世界と云います。時、所において第一から第三の三つの世界の考え方を、その時々に応じて当事者が納得する言葉を選んで進むという道です。他人のために動きますから、これを利他の道と云います。

言霊ウの世界は欲望の世界一段階目です経済産業の世界です。

言霊オの世界は二段階目です学問科学の世界です。

言霊アの世界は三段階目です。宗教、芸術の世界です。

言霊エの世界は四段階目です。政治、道徳、倫理の世界です。

人間の心の進化は言霊ウ→言霊オ→言霊ア→言霊エ→言霊イ と進みます。

言霊イは神そのものの世界です。言霊を駆使し先を見通せる千里眼を持ち総ての悩みに的確な答えを下し進む道。

そして言霊通りの世界を具現できる人、聖知りです。

大昔、日本人の祖先はこのことを探求解明し、同時に、この五十音をどう配列したら、言い換えますと、人間がどのような心の持ち方、どのような精神構造であったら、理想なのであろうかと言うことを解明したのが五十音言霊音図なのです。

この場合、心の住む次元、すなわち母音を右側に配列します。そして人間の最も行動の眼目となる次元を五母音の中心に位置させます。

例えば

商売行為の眼目には欲望であり言霊ウです。しかし商人の世界が欲望、言霊ウであるとはいっても、商人には経験知、感情、道徳心等がないわけではありません。ただ商人は商売するとき、言霊ウ以外の次元はウ次元の目的を達成するための道具に使うことになります。その道具に使う他の四次元の中で大切な道具ほど中側から配列していきます。

そうしますとウ言霊中心に生きる人の心の母音体系は上よりアイウエオと並びます。そしてウ次元の欲望を達成するための意志の運び方、すなわち母音と半母音とを結ぶ架け橋である八つの父韻の配列は先に述べたようにキシチニヒミイリであります。

以上のことを総合して五十音図を作成しますと今私達が常に使っている五十音図を得ることになります。この欲望を真ん中に置いた心の配列を天津金木音図と云います。

しかしながらこの道理をそのまま進展させますと、この音図の他に更に四つの音図がある勘定になりましょう。すなわち言霊オ、ア、エ、イそれぞれを主眼にした心構えを現わす精神構造の音図で

す。言霊オである経験知、一般に科学的探求に必要な心構えの音図、赤玉音図 言霊アである芸術宗教に備わった感情構造音図、宝音図といます。言霊ウオアの次元の事象をどのように選択していくかという、一般的に道徳、政治に必要な言霊エである心構えの音図、これを天津太祝詞音図 更に言霊イである、精神の深奥にあって他の四つの次元の原動力となる人間意志そのものの音図、これらの四種があるはずです。天津菅素（すがそ）音図